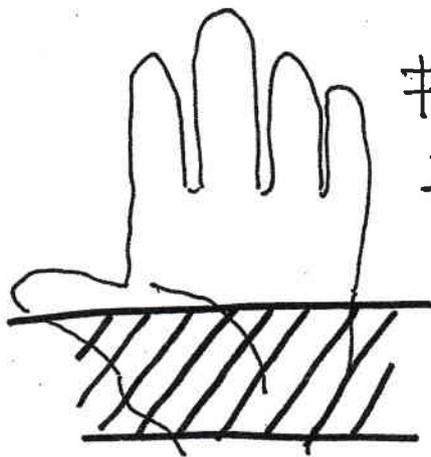


道室

道室と云う名称は吉田上野介重賢(よしだこうすけのすけ(げ)かE)と云う人が出家した院号にちなんだものです。

中仕掛の表面の凹凸を平滑に仕上げる為に使います。

中仕掛を挟んで上顎の方から下顎の方に向かって揉みおろします。強く巻締めするには指先ではなく掌の根本のところに道室を挟んで、両肘からの力を使って強く締めます。



肘を張り
左右の肘の力
で締めます

指先ではちからが入らない。
IIIIII の部分を使う。

端が斜めになった
道室は斜めのところを
使います



肘を張ると
IIIIII に力が入り易い

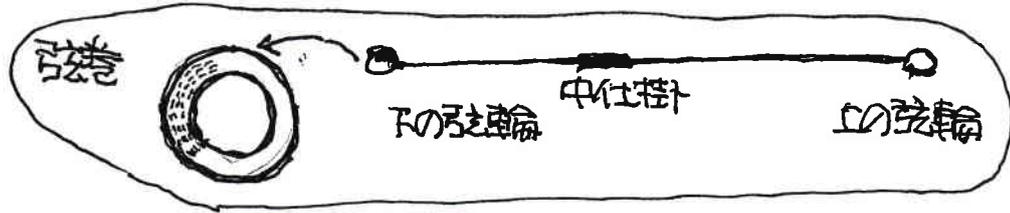
道室には糊が付くことは避けられませんが、糊の付着をすくなくするためには道室で先に中仕掛を締めしてから糊を付けることです。

糊の付いた道室はときどき濡れたタオルにくるんで数分置くと糊が浮きあがります。ハサミの背とか包丁の背とかでこそぎ落します。

弦巻

弦を巻く時は下の弦輪から巻いて行きます。

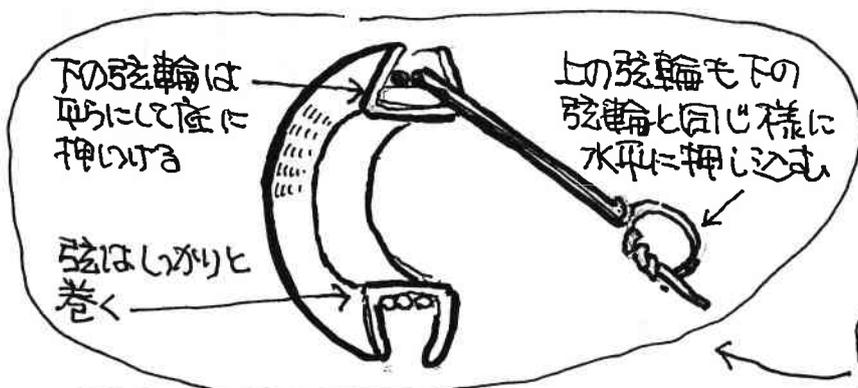
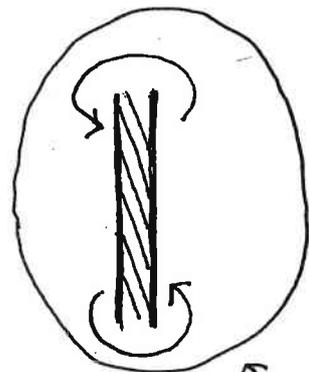
これは上の弦輪を弓の末強にかけてそのまま素早く引き出す為です。



巻く時は弦に折れ目を付けないこと、よりが戻らぬように注意することが一番大切です。無造作にただクルクルと巻くとあちらこちらに折れ目がついて、その場所でよりも戻ってしまいます。

下の弦輪は弦巻の底に平らに押しこんで、輪が左右に捲く様にして親指の先でしっかりと押さえます。そのままで弦を強く引いて、(つかり)と引きながら巻いて行きます。

弦は良く見るとこのような方向によられています。このよりが戻らぬように捻じりながら巻きます。



巻く時は弦のよりを考えて弦が弦巻のどちらかを回しよから弦を巻き取る

強く引きながら巻き込むためにこのような方法もあります。



弦巻を右に巻いたら左から巻き取る

くすね

漢字では現在薬練と書かれますが古い資料では天鼠とも書かれます。天鼠はこうもりのことですかオランダ医学に関係しているようです。
(竹内尉 弓道 健文社 1928年)

くすねはギリ粉と同じように自分で作ることも出来ますが臭いや煙また引火のこともあるので今は弓具店から購入することが普通です。

ボンド等が使われるようになった以前は中仕掛や握皮を巻く時も全てくすねですが油分が少なく硬目の夏用と、油分が多く柔らか目の冬用とがあります。硬いくすねを柔らかくするのに火で熱すると油が飛んで後で硬さが増るので皮に挟んだくすねは体温で柔らかくしました。

弓具店で販売されているくすねはポリエチレンで包んだ館主様のもや絵具のようなチューブに入ったもの、またコーヒー用のミルクの様な容器に入ったもの等があります。

チューブやミルク容器のようなものは湯煎程度の熱では溶けずとても不便です。これらはむしろ一度凍らせてから容器を刃物で取り去り、中味をチャック付のポリ袋に入れるのが良いと思います。

チャック付のポリ袋に入れたものは広く伸ばして折り取って使うことが出来ます。



麻ぐすね

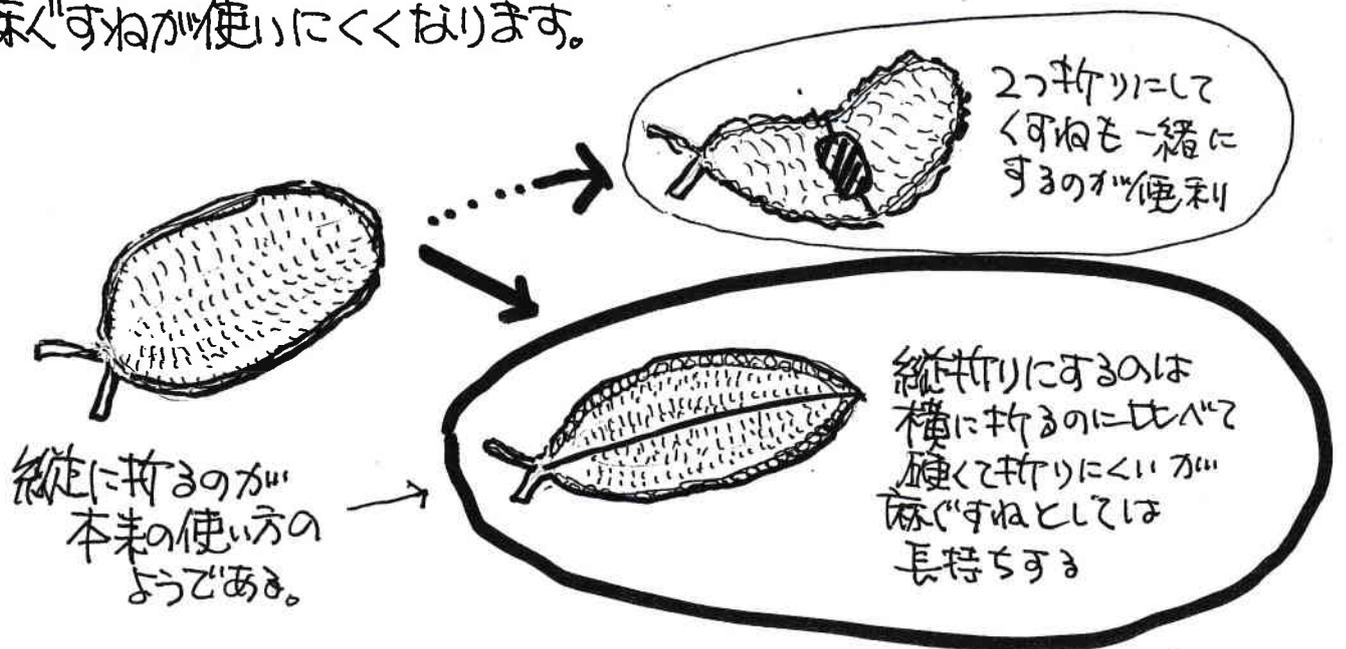
麻弦を使う場合は弦を保全するため麻ぐすねは不可欠のものです。
しかし合成弦が主流となってからは麻ぐすねを使う人もなくなり、合成弦の場合には麻ぐすねを使う必要はないと説明する弓具店もあります。

合成弦であってもくすねと麻ぐすねの手入れをしなければ、弦は毛羽立ちます。麻弦とは異なり、弦の寿命にさほど影響は無いとは云え弦の毛羽立ちは見苦しいものです。

麻ぐすねは2つに折って使いますが長い辺を2つに折るのが普通です。けれど本当は長い辺はそのまま、短い辺を2つに折るのが望ましいと聞きました。縦長のものを更に縦に折るのは縦糸と横糸の密度の差で麻ぐすねの耐久性にちがいが生じる為です。

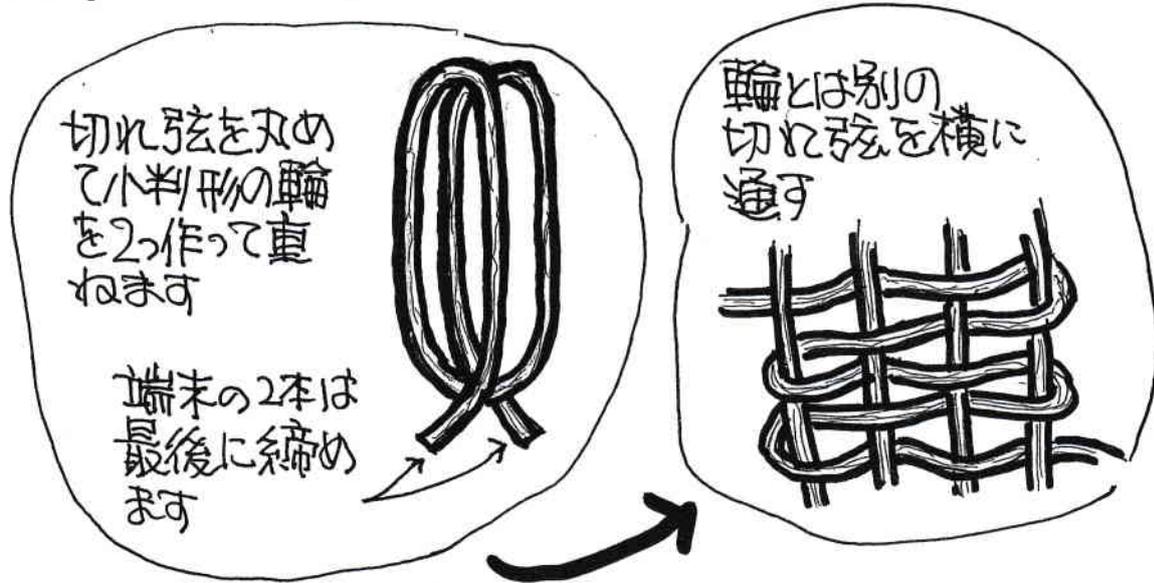
合成弦で麻ぐすねを使う場合2つ折りの中央にくすねを浸み込ませておくのが便利です。

麻ぐすねにくすねを載せてレンジで加熱しますが加熱が過ぎると麻ぐすねが使いにくくなります。



麻弦が切れた時は各自で"それで"麻ぐすに編みました。

編む要領は次の通りでした。



合成弦でボンドか糊で中仕掛を作っている時は中仕掛に麻ぐすねは掛けません。麻ぐすねは弦の力を強くしたり緩まぬように掛けるものでボンドや糊で作った中仕掛には掛ける意味がありません。それどころか緩く作った中仕掛ではこのために上下にずれ動くことになります。

仕掛麻

中仕掛を作る麻は麻の切れ弦から作るか、弓具店から購入します。

切れ弦から作る場合は上下の弦輪と中仕掛は取り除き中仕掛より下の部分を3等分、上の部分を4等分するとおよそ25センチの麻7本くらいが得られます。

切れ弦を使う人の好みは正に千差万別で、弦に付着していたくすねを除去せずにそのまま使う人から、徹底的にくすねを取り除いて使う人、そして両者の中間の人まであります。

くすねが付着したままでも使う場合は、切れ弦を指先でほぐし、道室でしごいて柔らかく伸ばしてから中仕掛を作ります。麻弦を使い、くすねを使って中仕掛を作る場合は弦のくすねと中仕掛のくすねがよく締った中仕掛になります。

綺麗にくすねを取り除くには一般的には湯を使います。最初に切れ弦の端を糸か輪ゴムで束ねるともつれる音が防げます。

容器に湯を入れて加熱し、何度か湯を取り替えると、くすねが溶け出して湯の色は変わります。

湯を通し終えた麻弦は紫外線を避けて陰干します。乾いたら指先でほぐし短かいものは取り除き道宝でしごきます。道宝でしごくことで麻はしほやかになりちぢれも伸びます。

湯を使う場合容器で煮る以外に、牛乳カップに入れて熱湯に浸す方法もあります。

切れ弦を使って仕掛麻にするのに、米のとぎ汁に漬ける方法もあります。

自分自身は専ら容器で煮て、湯を取替える方法でしたので

とぎ汁を使う方法はまだ十分な経験はありません。

とぎ汁を使う場合は常温で良いと聞きますので一番手軽と思います。

弓具店で仕掛麻を購入した場合は長い時の素材が多いと思われるます。

25センチ位に切りそろえて一端を束ねて、湯を使うか とぎ汁を使って切れ弦と同じ様に仕上げます。

購入した新弦に付随する麻も購入した仕掛麻と同様の手順で柔らかくします。

素材のままの麻は腰が強いのでそのままでは中仕掛にする時柔らかく巻き納めにくくなります。

弦の補修

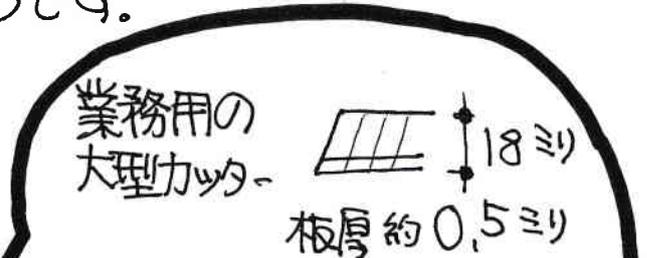
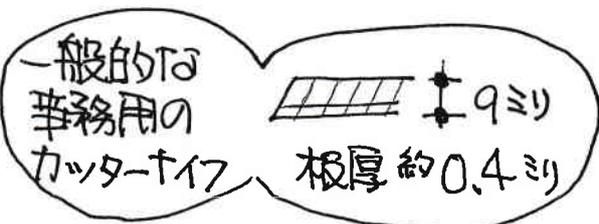
矢番への所がやせて細くなるのは先に述べたように麻の巻き方が緩い為ですが、全体を作り替える程ひなければ、その箇所だけ補修します。

道宝で締めしてから糊を付け、麻を巻きますが、細い麻で巻くか、巾広く、うすく巻くかを考えます。最後にもう一度道宝で締めます。

糊を付けてから道宝を使うことは可ですが、道宝には糊が着くので、後仕末がよいようです。

古くなった中仕掛を全て撤去する時はカッターナイフが適していますが、よほど慎重に作業しても弦の本体を傷めてしまいます。その弦は後にその中仕掛のところで切れることを経験します。竹引にとって弦切れは好ましいことですが、その代り審査には避けたほうが良いでしょう。

最近教えて頂いたばかりで（自分ではまだ試していませんが）業務用の大型カッターナイフは本体の巾が広く、板厚も業務用のものより厚いので、具合よく取り除けるそうです。



関板に当たる弦のほつれ

弓の形や弦の高さにおいては、関板のところでほつれる事があります。箸をかける音尺ではないので、道宝は使わず、**広く巻きます。うすく巻く**

タセルを固く巻くと良い

巾18ミリの弦にピッタリとあてて、中仕掛をそぎ落とすので、弦を傷つけない

カッターの刃は弦から浮かせておくといい

指で糸く

弦と中袋

弦を外した後は弓を中袋に納めて弓巻に巻くことが一般的ですが、弦に折れ目をつけないよう充分注意しなければなりません。中袋の役目は弓を丁寧に保護することと、弦のくすねで弓を汚す華を防ぐためと理解されています。

末張から弦輪を外し、弓を中袋に入れた後再び弦輪を掛け、弦を中袋の上に巻き、弓巻で巻くと云う作業は弦の折れやよりの戻り防止の爲で過酷な操作と云えます。

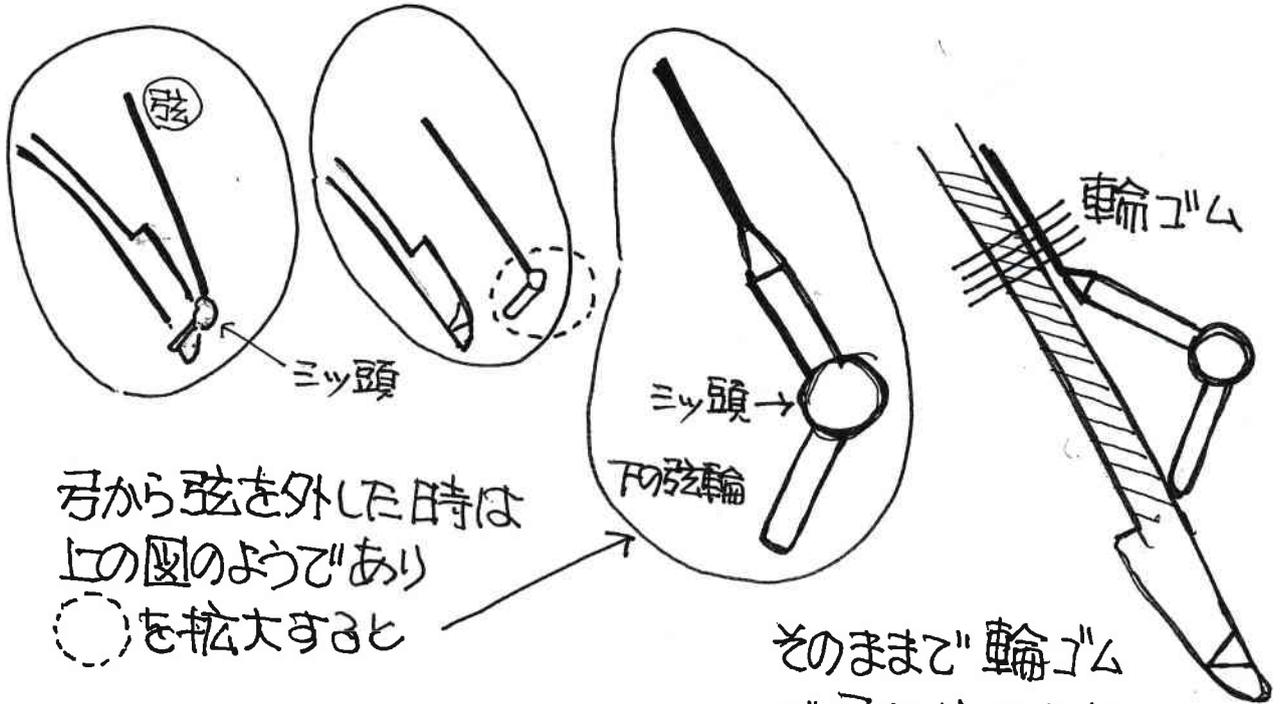
昔の絵巻物では弓は袋に入れて持運びされ、靴が収まった平和な世は「...弓は袋に、刀は鞘に...」と云われていました。

鯉の弓は夏と冬とで使い分けが必要でしたので、うこんで染めた木綿の袋に収めておられました。弓巻は近世になってのものと思われ、うこんと云うのはうこんと云う植物の根から得られる黄色い染料で虫を寄せず、湿気も叩かないと云われます。

その為か今でも中袋は黄色が多くなっていきますが、染料は化学染料で布は化学繊維です。また季節毎に弓を替えることがあっても鯉であればうこん染の木綿が必要です。

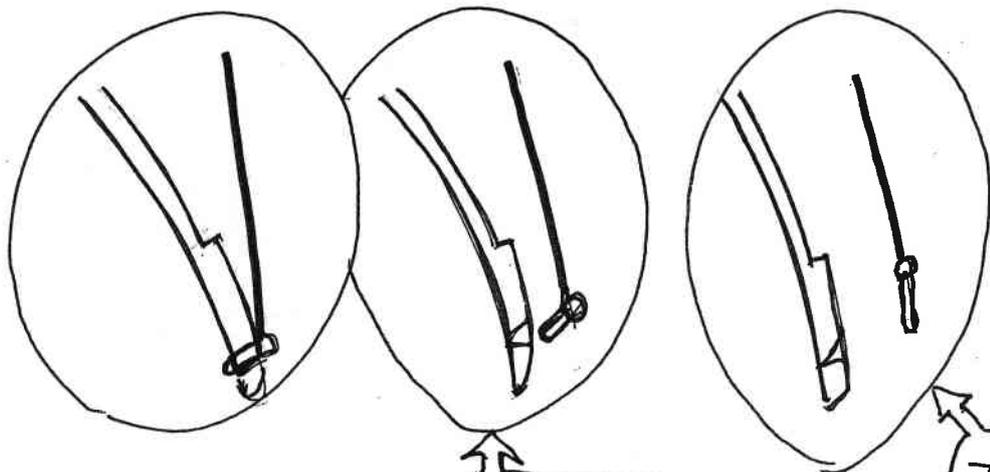
くすねが弓に付くことがあってもアルコールやマニキュアの除光液で拭けば容易に落すことが出来るものです。合成染料で染めた化学繊維の中袋に入れる事と弦の保全の兼ね合いはなかなか興味深いことからと思います。

下の弦輪



弓から弦を外した時は
上の図のようであり
○を拡大すると

そのまま"輪ゴム
で弓に止めると
弦の太さの変わる所で"
弦が折れてしまいます



この時弦を
引張ってテンションを
掛けた状態で"
ミツ頭を押えて
平らに伸ばします

下の弦輪を
伸ばしたら
輪ゴムで止め
るか 止め弦(弦
止め)で止め
ると、折れ且は
つきません

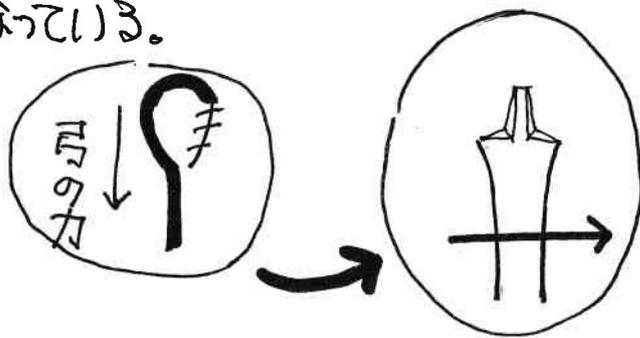
上の弦輪を裏返すと云うことについて

これは弦それ自体の維持や保全にかかわることではありません。
昔から出木になりかかっている弓は上の弦輪を裏に返すと出木が進まず
入木に補正することが出来ると云われています。

なぜそうなるのかと云うことが理解出来なかったため長い間自分では
試みたことがありませんでした。

2019年の春厚木に住む弓師の今井さんに尋ねたところ 明快な答
を頂き、早速実行して見てその効果を実感することが出来ました。

今井さんの説明によれば (... そのままの言葉ではありませんが ...)
弦を張っている時弓の力は上の弦輪ではもじりの無い方にかかって
おり、弓を出木の方に押す力に他ならない。もじりは摩擦によっ
て弦輪が伸びないよう引き止めており出木・入木の力の方向で
はない。上の弦輪と下の弦輪とは表と裏とが逆になって陰陽
となっている。



弓の力はもじりのない方にかかっており、この力は弓に対しては出木の方に作用する

効果を実感することが出来ましたか 出木が更に進んだ弓の場合や
弓自体の個性もあることで 効果は一樣ではないと思います。

弓を張るとき

弓を張るときは弦のよりを保つ為2~3回捻ってから下弦に掛けます。
特に基準はないと思いますが多くとも5回を越えないことが良いと思います。
把の高さを調節する為回数多く捻ったり逆の向に捻る事はするべきではありません。

雨と中仕掛

ボンドや糊で作った中仕掛は激しい雨の日は湿気を吸って、矢も蓄える所
や中仕掛の端末は特に緩くなります。行射を終えて弦を外す前に一度
道室で締聖めてからボンドや糊を指先に付けて上からなぞっておきます。
翌日使う時は気持ち良く行射することが出来ます。

休め弦 (又は弦休め)

合成弦でも金属柄にあては下の弦輪に白い糸の短い輪がのいて
いる場合があります。これは今のように輪ゴムが普通に使われる
以前外した弦を留めていたものです。弦輪を外してから弦も弓
に何回か巻きつけて糸の輪の長さを調節して下弦にからませて
留めておきます。